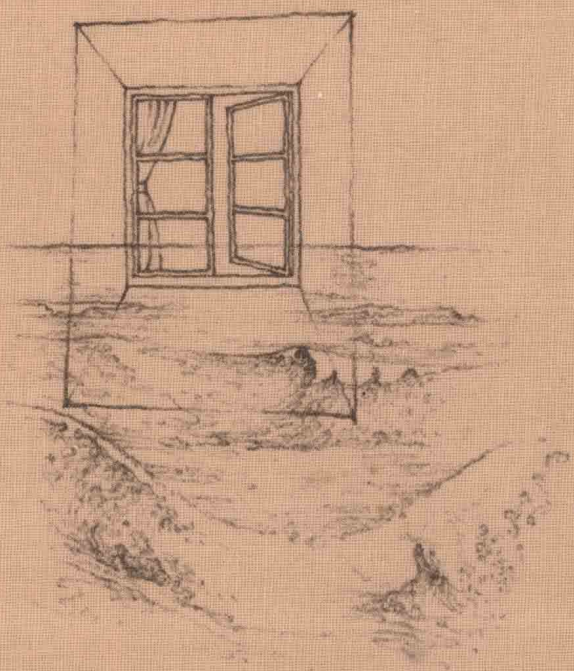
微笑

近藤啓太郎



微　笑

近藤啓太郎

新潮社版

© Keitarō Kondō 1974, Printed in Japan.

微笑

昭和49年10月15日発行
昭和50年4月15日6刷

著者　近藤啓太郎
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
162東京都新宿区矢来町71
Tel・業務部(03)266-5111
・編集部(03)266-5411
振替　東京4—808
印刷所　二光印刷株式会社
製本所　新宿加藤製本株式会社
定価　850円

乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

微

笑

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

一　章

目が覚めたとき、定宿のいつもの部屋ではないのでちょっと驚いたが、傍に寝ている女に気づくと、すぐに記憶が甦った。昨夜、私は銀座のバーの女を誘って、このホテルに泊ったのだ。女はまだ眠りこけている。腕時計を見ると、十時であった。

「十時……？」

とつぶやきながら、私は何か思い出さなければならぬことがあるような気がした。

すぐには思い出せず、煙草に火をつけた。天井を眺めながら、煙草を吸っていると、不意に気がついた。寿美が今夜の十時、羽田空港に到着の予定であった。

昼前、私は定宿の「野波」に帰り、女将（おかみ）の波ちゃんと暫く雑談してから、南房州鴨川のわが家へ帰る支度をはじめた。羽田に出迎えれば寿美が喜ぶのは目に見えているが、面倒臭い。といって、東京での用はすんでいて、私は遊んでいるだけなのだから、寿美が海外旅行から三週間ぶりに帰って来るとき、家を留守にしているのも、ちょっと具合が悪い。

夕方、私は南房州鴨川のわが家に帰って来た。昭和四十六年八月二十五日のことである。

東京から帰宅して、何よりの愉しみは、新鮮な魚の味である。私は風呂に入ってから、鯵（あじ）のた

たきと平目の煮つけで一杯飲み、飯を食った。食事が終って暫くすると、遊び疲れのせいか、たまらなく眠くなってきた。

夜中に、目が覚めた。腕時計を見ると、一時すぎであった。私は寝床の中で雑誌を読みながら、寿美の帰りを待った。

明け方近い三時すぎ、寿美は帰って来た。隣り町の天津に住む、寿美の姉と一緒の旅行だったので、その息子が羽田まで自動車で迎えに行き、送って来てくれたのである。

「啓坊さん、起きて待っていてくれたのね。ありがとう」

と寿美は玄関に入りながら、嬉しそうに私に言った。

五十一歳の私を、四十二歳の寿美が「啓坊さん」とは珍妙だが、二十年前の結婚以来、習慣となっているのだから、仕方がない。

結婚したとき、寿美はまともな呼び方が照れ臭く、当時まだ健在だった私の母親が子供の頃からの癖で、「啓坊さん」と呼んでいたのを、見習ったまま、今日に及んでいるのであった。

リビングルームに入って、寿美が荷物を置くと、私は煙草に火をつけながら言った。

「お茶をいれてくれ」

「はい」

と寿美はリビングルームに続いた食堂へ行き、茶の支度をした。

「文や啓坊を起して来い。お前が帰って来たら起してくれ、と言っていた」

間もなく、高校一年の長女の文、中学二年の長男の啓一郎、それから二十二歳の手伝いの恵美ちゃんも起きて来た。

寿美はみんなに土産物を渡した。私が頼んでおいたランバンのレインコートも買って来てくれた。

「このレインコートには、苦労しちゃった」
と言い、寿美はわれながらおかしそうに笑った。
寿美は私と同様、全く外国語が出来ないので、コートを買うとき、身振り手真似の連続だったという。
寿美は私の肩先から手首までの寸法を計って行ったのだが、首筋からの寸法でなければ駄目だと店員が告げ、残念そうに首をすくめ、両手をひろげて見せた。が、商売熱心な店員で、自分の肩幅より広いか狭いか、と改めて問いかけてきた。
寿美が両手を少しひろげて見せると、店員は自分よりも肩幅の広い同僚を連れて来た。背が低いと寿美が告げると、係りの店員はそれが癖のようにまた首をすくめて見せてから、今度は背の高い同僚を連れて来たが、これは痩せすぎている。寿美は係りの店員を連れて店内を物色し、私の背恰好に最も近い店員をつかまえて来た。
しかし、身長百七十八センチの私よりは少し背が低いので、その店員に爪立たせた上、とっかえひっかえコートを着せたあげく、買って来たという。
「二百二十ドルもしたわ。ふつう百ドルくらいだっていうでしょう。田舎者なので、ごまかされたのかしら……？」
「そんなことはないさ。ランバンの店員だって、さんざん苦労したんだもの、少しは高いのを売らなきゃあ、合わないよ。それにしても、二百二十ドルっていうと、八万円か。日本で買うと向うの倍以上の値段になるっていうから、ずいぶん高いコートだな。バーで酔っぱらって、忘れて来たら、大変だ」
「ほんとよ。着ないで、しまっておいた方がいいわ」
と寿美は冗談ではない口調で言った。

「え？」
と私は呆れて訊き返し、寿美もつい本気でそう言った自分に気がついて、恥ずかしそうに笑った。
「お母さんらしいことを言うわ。お母さんたら、ほんとにケチね」
と文が横から言い、ついで気になったのか、
「わたしのカメオ、幾らだったの？」
「二万二千円もしたよ。イタリアに行ったら、円の切上げがどうのこうのって、一ドル、三百二十円になっちゃって、損したわ」
「ぼくのお土産は、万年筆だけかい」
と啓一郎が不満そうに言った。
「お前は男の子だもの、わざわざ買って来るようなものはなかったよ」
「お母さんは自分はセーターなんか買って来たんだもの、ぼくにだって、セーターを買ってくれば、いいじゃないか」
「お母さんはロンドンで急に寒くなったから、買っただけじゃないの。セーターなんか、わざわざ外国で買う馬鹿はいませんよ」
「じゃ、万年筆だって、同じことじゃないか」
「そんなこと言うんなら、返せ」
と寿美は啓一郎の手から万年筆を奪い取ろうとした。
「なんだい、よせよ！」
と啓一郎は怒ったが、相手が悪いと見て、文にあたり出した。
「やい、文。そのカメオ、おれによこせ」
「厭。助けて！」

と文は大げさに悲鳴を上げながら、飛び上って逃げ出し、啓一郎が追いかけた。
「相変らず、うるさいですね」
と寿美は私に言い、追いかけっこをする二人を愉しげに眺めやってから、啓一郎を叱った。
「啓坊、よしなさい。啓坊！」
私は「啓坊さん」で、啓一郎は「啓坊」か「啓坊ちゃん」である。
啓一郎は叱られても追いかけることをやめないが、土産が万年筆だけでは無理もない。文も恵美ちゃんも、カメオと手袋だけであった。
「お前も土産を、もう少し買って来てやったら、どうだ」
と私は寿美に小言を言った。
「だって、もったいないですよ」
「もったいないも、ときによりけりだよ」
「そうだよ」
と啓一郎が割りこんで来た。
「お母さんのケチ！」
「うるさいよ」
と寿美は怒りながら、
「お父さんが無駄遣いばかりするから、お母さんがケチになるのよ」
「また、はじまりやがった」
と私は腹立たしげに言ったものの、帰朝そうそう夫婦喧嘩も煩わしいので、立ち上った。
「さ、ひと眠りしようぜ」
「おれもつまらないから、寝ようっと」

と啓一郎も立ち去ろうとすると、寿美は気分一転してからかいはじめた。
「啓坊ちゃん、そう怒るなよ。なんだよ、その顔は？」
「うるさいよ！」
「今、お土産に、フレンチカンカンを見せてやるよ」
「フレンチカンカンて、何だい？」
「見れば、分るよ」
と立ち上るなり、寿美は笑いながら活発に踊り出した。
「タンタン、タカタカ、タンタン、タカタカ……」
寿美は太っているが、全身が柔軟で、運動神経は良い。思いがけない高さまで、脚が交互に跳ね上った。太い股が、まる見えになった。
啓一郎は恥ずかしそうに、甲高い声を上げて笑い出した。文や恵美ちゃんも笑いころげた。
寿美は踊って人を笑わすのが、得意であった。大きな臀と敏捷な動作とが、ちぐはぐな感じで、自ずからユーモアがあり、私もいつも笑った。暫く笑わせてから、寿美は踊りやめると、啓一郎に言った。
「啓坊。お前、お母さんみたいに、脚が上るか？」
「そのくらい、おれだって上らい」
と言って、啓一郎が脚を跳ね上げて見せると、寿美は大げさに驚いて見せた。
「お母さん、こういうの出来るか」
と啓一郎は得意になって、今度は後方へ見事に脚を跳ね上げて見せた。
「どうだ、凄い内股だろう。いつもこれで、みんな投げちゃうんだ」
啓一郎は柔道が抜群に強く、中学二年生のくせに初段の試験を受けたとき、高校生を二人も投

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

げ飛ばした。身長百七十二センチ、体重七十五キロ、馬鹿力の持主で、年中、「腹が減った」と言い、トンカツなら三枚、コロッケなら十個は食べないと、満足しなかった。

啓一郎の母親だけあって、寿美も力は強い。あるとき、襖を開け放した部屋の敷居際に私が寝そべっていると、寿美がミシンを運ぶから手伝ってくれと言った。厭だと言うと、寿美は掛声もろとも旧式の重いミシンを持ち上げ、そのまま、寝そべっている私の上をまたいで、運んで行った。

私は一人っ子で育ったせいか、わがままで、人使いがあらい。寝そべっていて、煙草が喫みたくなると、台所で働いている寿美を呼ぶ。起き上って手をのばせば机の上に煙草も灰皿もあるのだが、それだけの動作が私は面倒臭くて、寿美を呼ぶのである。あまりにも人使いがあらいので、さすがの寿美もある日、私に文句を言った。

「啓坊さんは、全くいい身分ね。一日中、寝て暮してさ。たまにはわたしも、一日中、寝ていたいわ」

「寝たきゃあ、寝てりゃあいいじゃないか」

「何言ってるのよ。すぐ人に用を言いつけるくせに。寝たくったって、寝ていられませんよ」

「じゃ、用を言いつけないよ」

寿美は自室へ行って寝ころがった。一時間余り経った頃、私が寿美の部屋をのぞくと、姿がない。探してみると、庭の畠で働いていた。尻からげして、鍬をふるい、大汗をかいている。

「なんだよ、お前は一日中寝ていたいって言ってたくせに」

と言って私が近づくと、寿美は声を上げて笑った。

「わたしは貧乏性に出来てるんだわ。一時間も寝そべっていたら、もう退屈しちゃって、軀中がうずうずとして気持悪くなってきちゃって、じっとしていられないのよ。今、働いたら、軀中が

さばさばして、気持がいいったらありゃあしない」

そう言って、また朗らかに笑った。

寿美は身長百六十センチ、体重六十キロ、二十年前の「ミス千葉」であった。

当時のミス・コンクールは、新聞社と保健所の共催であって、「将来の健全母性のため」という主旨だったのである。審査の主眼も心身の健康状態におき、容姿の美は二の次であった。師範学校を出たばかりの中学教員だった寿美は地元の保健所の職員にかり出されて参加した結果、ミス千葉に選ばれたのであるが、確かに健全母性の名に恥じなかった。

寿美は「快眠、快食、快便」と三拍子そろい、たまに風邪で高熱を発しても、薬や医者を嫌い、あたりまえに起きて働いているうちに、けろりと直ってしまう。子供の教育のモットーは「正直と努力」であり、私が面白半分に啓一郎に酒を飲ませて酔っぱらわせると、本気になって怒った。

寿美はその日、さすが長旅の疲れが出たせいか、夕方まで寝て暮した。

夜になって、館山から電話があった。私の美術学校時代の同級生で、山梨大学に勤めている加藤和夫の夫人からであった。

夏休みのアルバイトで、館山のホテルに働いている大学生の娘を、迎えに来た。ついでに鴨川へ寄って、久しぶりにみなさんとお目にかかりたい。

そういう電話に対して、寿美は翌朝自動車で館山まで迎えに行くと応えていた。

「今日、帰って来たばかりで、疲れているんだから、館山までの運転はやめておけ」

と私は言った。

「大丈夫ですよ。ひと眠りしたら、すっかり疲れがとれちゃったもの」

寿美は私を神経質で気が小さいと言って、よく笑う。私の方はそんな寿美に苛々する。如何にも農家育ちの丈夫な女らしい無神経さが、私にはやり切れない。

寿美はケチだが、食物にだけは金を惜しまず、毎日の食卓が盛沢山でなければ気に入らず、味は濃厚であれば佳しと信じて疑わなかった。若布や豆腐の味噌汁にも卵を落すので、私は怒るのだが、寿美にはとんと納得出来ぬらしい。鯛は佳しとして、季節はずれでも買って来る。文句を言うと、鯛はやはり鯛の味がすると言う。そんなわけだから、手のこんだ料理には縁がない。ただ、寿美の取柄は、新しいものと古いものとの見分けがつくことである。野菜にしろ、魚にしろ、新鮮なものは妙に手を加えない方がうまいので、私は救われていた。

寿美は客のとき、さらに食卓が賑やかでなければ気がすまない。それだけに、食物のつましい家を嫌い、悪口を言う。

「昼ごはんに無理にひきとめておいて、素うどん一杯とは、一体どんな気でいるのかしら。失礼だわ。ああいう家は、ふだん何を食べているんでしょうね」

「そのうどん、まずかったのかい？」

「わりにうまかったですよ。でも、いくらうまくっても、うどんはうどんだもの、知れてるわ」

「そこの家じゃ、素うどんが得意の料理で、わざわざ作ったのかも知れないよ」

「いくら得意でも、うどん一杯だなんて、第一、おなかが減って、やり切れないわ」

「昼飯は軽い方がいいっていう、考え方の家もあるよ」

「軽すぎますよ。だから、あそこの家の子供、みんなちんちくりんなんだわ。食物のつましい家の子って、みんな背がのびませんよ」

「そういうことを言うのはよせ」

寿美の言葉には身も蓋もなく、聞いているだけで私はやり切れない。が、そういう寿美の見方が案外にあたっていることが多く、その度に私はまた奇妙な腹立ちを感じた。

寿美が近所の人々に誘われて、岩蹴躅を採りに行ったことがあった。庭に植えるというのであ

る。
「せっかく自然に山に生えているものを、採って来るのはよせ」
「みんな採って来るんだもの、わたしだけが採らなくったって、同じことですよ」
「みんなが採って来るんだから、せめてお前だけはやめておけ」
「また、啓坊さんの屁理屈がはじまったあ」
と寿美はてんから受けつけないので、私も切札を出す。
「第一、山っていったって、人のものだ。一種の泥棒じゃないか」
「啓坊さんだって、よく茸採りに行くじゃないか。あれだって、人の山のものじゃないの」
「茸と躑躅は違うよ」
「勝手なこと言ってらあ。それより、啓坊さんも一緒に行ってみない？　とっても、景色のいいところだっていうよ」
と寿美はからかい半分に言って、オートバイに乗って行った。
三時間ほどして、寿美は背負い切れないほどの岩躑躅をオートバイの荷台に乗せて帰って来たが、顔や手に怪我をしていた。岩をよじ登って転げ落ちたが、ひるまずにまた登り、採って来たという。
「お前は丈夫に任せて、乱暴なところがある。お前みたいのは病気では死なないかわりに、交通事故でやられるぞ。自動車の運転だけは、気をつけろ」
と私は常々寿美に注意していた。
自動車よりオートバイはさらに危険なので、私はその後、オートバイは寿美の弟にくれてしまった。
しかし、いくら注意してもほとんど効き目はなく、寿美は却って私を神経質だと笑って、苛々

させるのであった。

寿美は昼前、加藤夫人を乗せて館山から帰って来た。娘さんはアルバイトの契約が明日まであるので、今日は鴨川へ来られぬという。そんなところへ、作家仲間の庄野潤三親子が訪ねて来た。

庄野は数年前まで、夏になると隣り町の太海へ、一家を引具して海水浴に来ていた。滞在中の一日を選び、寿美が作った弁当を持って、私の一家が太海へ出向き、庄野一家と仁右衛門島で遊ぶのを例としていた。

ところが、近年は南房州も湘南なみの混雑となったので、庄野は敬遠して広島の海へ行くようになった。しかし、今年七月末に長女が初産した関係から、広島へ行けなかったので、手近な鴨川を選んで海水浴に来た。昨日から鴨川の旅館に泊っている庄野親子を、私が昼食に誘ったのであった。

寿美は手伝いの恵美ちゃんと汗を流しながら、さまざまな魚の料理を作った。きのう海外旅行から帰って来たばかりだということを知って庄野は恐縮したが、寿美は余裕綽々に振舞っていた。食事の用意が出来ると、寿美は一升壜をテーブルの上に置いて、庄野に見せた。

「これ、知合いからいただいたんですけど、初孫っていうお酒なんです。庄野さんに、ぴったりでしょう」

「ほほう、初孫か……！　これは、愉快や」

と庄野は目を見張って無邪気に喜んだ。

翌日、恵美ちゃんは天津の親元に帰って、三日間休むことになった。午後から、寿美は加藤夫人と一緒に娘さんを迎えに行き、フラワーラインをドライブして帰って来た。

その翌日、作家仲間の安岡章太郎親子が鴨川に遊びに来た。安岡は近頃、季節を問わず、ときどき鴨川に現われる。

安岡は以前、食物には大して興味を示さない男だったが、近頃は年齢のせいか、新鮮な魚の味が魅力らしい。それも旅館の料理ではなく、わが家の鰯の煮つけや塩焼きや、鰺のたたきの方が気に入っているので、私も嬉しい。

安岡親子と談笑していると、突然、犬仲間の荻野さん親子が埼玉の深谷から自動車で遊びに来た。さらに、約束のあった新聞社のカメラマンたちが、わが家の紀州犬の撮影に現われた。

寿美は文を助手に奮闘したが、途中でグロッキーになり、休暇中の恵美ちゃんに電話をかけて、急遽助けを求めた。何しろ合計十数人の食事の支度だから大変には違いないが、今までにこの程度のことでグロッキーになる寿美ではなかった。

やはり、旅の疲れがまだとれないのであろう。明るいうちに、安岡、荻野、新聞社と帰って行くと、寿美は自室で暫く横になって休んだ。

夜になって、簡単な食事を摂ったが、寿美はいつに似ず食欲が無かった。

「どうも、胃の調子が悪くって」

「外国で食べ馴れないものばかり、食べたからさ」

と私は笑いながら言った。

「そうかも知れませんね」

と寿美も笑ってから、今度はつくづくと言った。

「でも、外国のホテルの食物のまずいのには驚いたわ。あんなひどいものを、みんなよく食べていますね」

「外国のホテルだって、うまいものはあるよ。団体旅行だもの、最低のものを食わされたのさ」

「そうかしら……？　それにしても、まずすぎたけどな」

と寿美はどうにも納得のゆかぬ顔であった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com